ホルトノキ

チャペル前のザクロ―今年は豊作

中高とも金賞 ―吹奏楽部

私たち吹奏楽部は前期、そして夏休みの間、八月に行われた吹奏楽コンクールの練習に全力を注いできました。結果から先に述べると中学校吹奏楽部はＢ組にて四年ぶりの金賞を、そして高校吹奏楽部は東日本組にて二年連続となる金賞、代表選考会出場を果たしました。また、中学校と高校で同一年度に金賞を受賞したのは一九九四年の吹奏楽部（当時は音楽部という名称）創部以降初めてのことです。今年の中学校は高校で演奏するレベルの難曲を、そして高校は吹奏楽曲の難易度の中で最難関と言われているグレード６の楽曲に挑戦しました。四月に初めて合奏をしたときは、中学も高校も一曲通しきることができず、演奏というレベルにさえ到達していませんでした。この時点では正直部員の皆も本当に演奏することができるのか、という不安でいっぱいだったと思います。しかし難しい曲に挑戦しているということもあってか、中学生は自分から高校生の先輩に積極的に教わりに行き、楽器を始めたばかりの中学一年生にきちんと指導していました。難曲を演奏するというのはとても大変な事ですが、個人個人の技術を大きく向上できる貴重なチャンスでもあります。中学生には是非この経験を糧に、どんどん成長していって欲しいと思います。同じように高校生も、同級生や先輩後輩と共にどのようにしたら上手く、より良い演奏ができるかということを例年よりも真剣に考え、実践し、取り組んでいるなというのを肌で感じました。その努力が合宿や本番の当日まで続き、このような素晴らしい結果に結びつきました。また、こちらも大変複雑で難解な曲に挑みましたが、立教池袋吹奏楽部らしいオシャレでノリのある素晴らしい演奏をすることができました。人間関係など小さなトラブルもいくつか起きましたがそれを乗り越えてこのような結果を得ることができたというのは、まさに吹奏楽・音楽という媒体を通して物事を考える、人として成長するという顧問の西澤先生の理念を体現出来ていたのではないでしょうか。

高校吹奏楽コンクールの様子

部長として、正直なところコンクールの期間中はとてもプレッシャーがありました。その分、自分の選んだ楽曲でこのような素晴らしい結果を残せたことにとても安堵したと同時に、創部以降初の快挙に携わることができて本当に嬉しい限りです。そして何度も指導・支援してくださった先生やコーチ、ＯＢ、そして保護者の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。

コンクールは終わってしまいましたが、十一月にはＲ.Ｉ.Ｆ.や池袋駅西口にあるグローバルリングでの演奏、そして三月には定期演奏会など今後もイベントがたくさんあります。どうか今後の演奏機会も部員一同楽しく演奏しますので、是非吹奏楽部の演奏をお楽しみいただければ幸いです。

（高二　齋藤浩太）

中学校吹奏楽コンクールの様子

福田旭君（高二）全国高等学校将棋選手権大会優勝

全国高等学校総合文化祭の将棋部門にあたる、全国高等学校将棋選手権大会に東京代表として出場し、優勝することができました。

急に表彰されたことで、今まで実績がなかったのになぜ全国優勝できたのか疑問に思う人がいるかもしれませんが、私が急成長を遂げたわけではありません。

私は最近まで、奨励会という将棋のプロ棋士の養成機関に所属していました。プロ棋士になるには、基本的にこの奨励会に入ることが必須となります。奨励会員というのは、アマチュアにもプロにも属していないものの、プロの卵のような立ち位置になります。そのため、今までアマチュアの大会に出場することができませんでした。

プロを目指して奨励会で日々鍛錬を積んでいたのですが、かなり厳しい世界ということもあり、将来を見据えて様々な理由から今年一月に退会しました。このような理由から、（晴れて？）大会に出場することができたというわけです。

全国大会での、印象に残った対局を少し紹介します。

ターニングポイントとなったのは、決勝トーナメント二回戦の、同じく東京代表の早稲田高校の生徒との対局でした。ラインニュースの記事にも取り上げていただきましたが、彼には私が普段教室で指導をしており、そのおかげで彼の棋力が上がり、ここまで勝ち上がることができたといういきさつもあります。

この対局に勝てば二日目に残れるということもあり気合いが入っていたのですが、途中で形勢を損ねてしまいました。さらに、持ち時間（自分が使うことができる時間）も少なくなってしまい、典型的な負けパターンに陥り半ばあきらめムードでしたが、そこから相手のミスで勝ちを拾い、良い流れを感じました。

決勝戦は強豪の灘高校の生徒との対局で非常に緊張しました。というのも、小学生、中学生の時に全国大会に出場した際は、どちらも準優勝止まりだったからです。油断のできない攻防が続き、集中を途切らさずに指し続け、無事優勝することができました。

今回の大会で、暗黒の奨励会時代に忘れていた将棋の楽しさを思い出すことができ、将来、将棋の棋士を仕事とすることはできなくとも、趣味として続けていきたいと思いました。

今後も二連覇を目指して腕を磨きます、と言いたいところなのですが、最近は部活（バスケ）のほうに熱を入れており、将棋はまったく練習をしていないので、二連覇はおそらく無理です。ただ、今回の全国大会は東京開催で家から連日通えてしまったのですが、（将棋の全国規模の大会は二日制のことが多いので、だいたい宿泊を伴います）、来年の全国大会は鹿児島で開催されるそうなので、それを楽しみに東京予選だけでも頑張りたいと思います。

（高二　福田　旭）

高校庭球部　関東大会・全国大会出場

二〇二二年度全国高等学校総合体育大会テニス競技大会 兼 第一一二回全国高等学校テニス選手権大会は、七月二八日（木）～八月三日（水）の日程で高知県立春野総合運動公園テニス場において開催されました。高校庭球部からは、男子ダブルスで林 陸人・金子正人（いずれも高一）のペアが東京都代表として出場しました。創部以来初となるインターハイ出場。高一ペアは全六十四ペア中わずか二組。一回戦で惜敗したものの、シード校相手にタイブレークの接戦でした。両名の伸びやかなプレイを間近で見ることができ、嬉しく思います。両選手は五月の都大会で第三位に入賞し、六月の関東大会ならびに八月のインターハイの出場権を獲得したペアです（関東大会ではダブルス第三位に入賞、金子はシングルスでも出場）。また次年度、この大きな舞台に戻ってこられることを目指したいと思います。ご声援ありがとうございました。以下は出場選手の感想です。

（顧問　吉田清典）

僕は高一で都大会は予選からだったのですが、ド

したが、学校の代表として堂々と自分のたちの試合ができたと思います。満足のいく結果ではありませんでしたが、初めての高校の大会で、さらにインターハイという大きな場で戦うことができたことは一生の思い出となりました。まだこれから先高二・高三と試合はあるので、全力を尽くして頑張っていきたいです。

（高一　林　陸人）

ロー運がよかったこともあり、何とか本選へ進出し、そこからも数ラウンド勝つことができ、関東大会に出場することができました。東京予選では不調の中、何とか勝つことができましたが、関東大会はそう甘くはなく、自分の思うようなプレーができず負けてしまいました。しかし得たものは大きく、自分の課題も見つかり、良い経験になりました。今後は今年度出られなかったシングルスでのインターハイ出場も目指しながら、今回見つかった課題を克服して頑張っていきたいと思います。

（高一　金子正人）

私たちは東京都を代表して高知県で行われたインターハイにダブルスで出場しました。一年生でインターハイに出られたことを率直に嬉しく思います。実際に行われた試合は、あと一歩届かず負けてしまいま

とうきょう総文に参加して―高校科学部

この夏、八月二日～四日にかけて行われた、全国高等学校総合文化祭東京大会、通称とうきょう総文に出場することができた。文化系のインターハイと呼ばれるほど大規模な大会で、演劇、吹奏楽、将棋など、多種多様な十九部門を全国の高校生が、全国に向けて

発表できる貴重な場である。毎年、全国の都道府県が持ち回りで会場を提供しており、今年は東京都が主催していた。私は自然科学部門で、化学系の研究発表をさせていただいた。三日間のプログラムの中で、交流会などもあったが、ほとんどの時間は他校の発表を見ていた。物理、化学、生物、地学、四つの部門に、それぞれの道府県から一校ずつ出場しているものだから、それはたくさんの高校生が、八つの会場で発表を絶えず行っていた。全国というだけあって、そのレベルは軒並み高く、私では内容についていけなくなることもあった。しかしながら、全ての発表には熱意がこもっており、話し方はもちろん、プレゼン資料、要旨、発表前の態度からも、自分たちが研究してきたことを、聴衆にどうにか伝えたいという思いが強く伝わってきて、心が打たれた。また、研究の内容が理解できた時は、たいていの場合、やりたいことが明確で、どれだけ実験を行っても、その目的に着実に向かっていることがわかる内容であった。定めた目的から離れない、この言ってしまえば当たり前のことの難しさを、自身で研究を行っていると常々感じる。しかし、全国レベルの研究発表を聞くことで、この重要性を改めて認識することができた。

実をいうと、このような全国大会という場で、私が発表を行うことができようとは本当に夢にも思っていなかった。本校科学部で六年間活動してきたとはいえ、受賞経験は一つもなく、この総文祭にも受賞という形で出場できたわけではなかった。しかしながら、先輩の研究を引き継いで進めていたことと、東京都が開催地であったため、出場枠が増えたことなどの様々な縁と、先生方の日々の指導の数々が重なって、今回出場に至ることができた。この大会で、私が実際に発表した時間は十五分に満たないが、そこに至るまでに書いた論文、直前まで悩み続けた要旨、練習を繰り返した発表、そして実際に、聴衆の前に立ち、自分自身の研究を発表できた経験は、本当に得難いものだと感じた。色々と悩むことも多く、苦労も絶えなかったが、部活動の最後の一年にこのような大会に出られたことは、よい締めくくりとなったと思う。最後に、このような機会を与えてくださった高文連の皆様、六年間親身になって指導していただいた顧問の先生方、なんだかんだ協力的だった腐れ縁の友人、応援してくれた部員、家族に感謝を綴り、参加報告としたい。

（高三　鈴木海都）

夏の栄冠―中高水泳部

水泳部（中学）が、八月九日（火）～十一日（木）で笠松運動公園新スイミングアリーナにて開催された「第46回関東中学校水泳競技大会」に出場し、以下の成績を収めました。

・4×100mフリーリレー　8位入賞　3分55秒71　山川朔太朗（中二）、菊谷 侑杜（中一）、長尾 竜ノ介（中二）、小杉 慶人（中二）

水泳部 菊谷 侑杜（中一）が、八月二十二日（月）～二十六日（金）で東京辰巳国際水泳場にて開催された「第45回全国ＪＯＣジュニアオリンピックカップ夏季水泳競技大会」に出場し、以下の成績を収めました。

・11－12歳100m平泳ぎ　優勝　1分08秒37

・11－12歳50m平泳ぎ　2位　31秒64

水泳部（高校）が、七月二十日（水）～二十二日（金）で千葉国際総合水泳場で開催された「令和四年度関東高等学校選手権水泳競技大会」に出場し、以下の成績を収めました。

・4×100mリレー　3分35秒90　インターハイ標準突破　色川 鳳竜（高二）今田 誠吾（高二）栗原 健太（高三）桐山 真葵（高二）

・4×100mメドレーリレー　3分58秒67　栗原 健太（高三）石田 涼馬（高二）田野倉 悠正（高三）桐山 真葵（高二）

・4×200mリレー　7分55秒49　色川 鳳竜（高二）今田 誠吾（高二）桐山 真葵（高二）栗原 健太（高三）

・200m自由形　決勝　1分50秒50　優勝　桐山 真葵（高二）

・400m自由形　決勝　3分56秒09　優勝　桐山 真葵（高二）

水泳部（高校）が、八月十五日（月）～十八日（木）で高知市東部総合運動場くろしおアリーナにて開催された「令和四年度全国高等学校総合体育大会（インターハイ）」に出場し、以下の成績を収めました。

・4×100mフリーリレー　3分41秒04　色川 鳳竜（高二）、今田 誠吾（高二）、髙橋 佳新（高三）、栗原 健太（高三）

水泳部 桐山 真葵（高二）が、八月二十四日（水）～二十七日（土）でMark Takai Veterans Memorial Aquatics Center（アメリカ、ハワイ）にて

開催された「第９回ジュニアパンパシフィック選手権（JUNIOR PAN PACIFIC CHAMPIONSHIPS）に出場し、以下の成績を収めました。

・100m自由形　25位　51秒52
・200m自由形　B決勝３位　1分50秒37
・400m自由形　5位入賞　3分54秒00
・800m自由形　10位　8分10秒23
・4×200mフリーリレー　3位入賞　7分22秒26（桐山 真葵 第一泳者：1分50秒69）

（顧問　中川太郎）

中高ゴルフ部 全国大会出場

二〇二二年度全国中学校・高等学校ゴルフ選手権大会は八月四日～七日栃木県で開催された。高校会場はサンヒルズカントリークラブ、中学会場はピートダイゴルフクラブ。本校ゴルフ部は中学と高校の団体戦でW出場。高校は通信制や強豪校の多い中で二年連続出場を果たした意義は大きく、中学は昨年途絶えた連続出場を関東大会準優勝で見事復活した。五人登録して一日の出場は四人まで、上位三人の合計スコアで争う団体戦は、単に一人だけ上手い選手がいても勝てない面白さがある。学校クラブ活動の意義がここにある。

以下は出場選手の感想。

（顧問　増田　毅）

○高校団体戦33位

色々な感情に左右された四日間、炎天下の中、楽しみながらも結果を求めて必死に戦ったこの全国大会の舞台は今までの部活動すべてが詰まったものでした。今年度をもって休部となってしまうため実質今年が最後の全国で戦う団体戦の機会になってしまった。今年のメンバーは中学時代から共に戦ってきた先輩方や同級生、後輩であり思いの強いメンバーでの試合でした。全国の舞台にまた戻ってこられたということ、最後の年に全国に進めたということでとても嬉しいものがありました。しかしながら、最後の年に結果を残したいと言う気持ちはメンバー一同同じ思いであり、本番の二日間を戦いました。結果としては前年度よりも順位としては落ちてしまい悔しい思いが強く残る結果になりました。その中でも仲も良く、頼もしすぎる先輩方達に支えられ、楽しくそして一段とゴルフに対して向き合えるようになった最後の全国大会となりました。今年度でゴルフ「部」としては活動を終わりとなってしまいますが、これからも各々が個人のレベルでゴルフに取り組み、また良い報告ができるように邁進して行きたいと思います。

全国大会までの道をすべて見届けてくださった顧問の先生、保護者の方々に感謝を忘れずこれからも頑張って取り組んでいきたいと思います。

（高二　諏訪貴皇）

○中学団体戦９位

僕が中学生になって初めての全国大会。関東大会を勝ち抜いて中学生最後の年に仲間と共に参加する事ができた。団体戦は四人一チームで戦うものである。

全国から集まった選手達を前に、周りの雰囲気は通常の大会とは全く違う緊張感もあり、気後れしてしまいそうになったが、いつも一緒のメンバーといる安心感もあり、大会本番では平常心を保って試合に挑む事ができたと思う。加えて他校の選手達とも、ゴルフという競技を通して交流する事ができ、学ぶことも多くあった。

ゴルフは個人競技だけれども、チームになって戦うことは、通常のゴルフプレーとは違うプレッシャーもある。チーム全員で大会本番まで切磋琢磨しながら、沢山練習する事によって、全員の団結力がより一層深まったとも思う。プレッシャーも良い意味で緊張感となり、いつもと違う気合いにも繋がった。全国大会に出場する事が出来なかった同級生のメンバーの分も頑張れたと思う。

この晴れ舞台に出場できた事は大きな自信になったと共に、仲間と戦う喜びや、助け合いの精神だったり、技術以外の多くの学びができたと感じる。

この経験を糧に、これからも沢山練習をし、仲間と共に切磋琢磨して、より良い結果を残せるプレーが出来る様に頑張りたい。

最後になりましたが、素晴らしい環境でゴルフができていることを嬉しく思い、今回の全国大会に関わっていただいた両親、学校、友達に感謝します。

（中三　前田隆之介）

高校文芸部　夏の活躍

◆第三回　センバツ！全国高校生即吟俳句選手権　第十位　辻村幸多（二年）

特別賞　赤松優（二年）

◆第二十五回　俳句甲子園　全国大会（八月十九日～二十一日：愛媛県松山市）

赤松優、岡部優司、辻村幸多、三宅爽太、望月陸玖、小幡曜（二年）

入選　望月陸玖「天を撃つごとく開きぬ黒日傘」

優秀賞（中原道夫選）

辻村幸多「地下鉄が良夜へ顔を出すところ」

今夏は、俳句甲子園が三年ぶりにディベート形式で開催されました。我々文芸部は二チームが東京大会（地方大会）に出場したものの、惜しくも両チームともに敗退してしまいました。しかし、句そのものが評価され、一チームが投句審査によって全国大会に進出することができました（六年連続九回目）。

全国大会は、初日の予選リーグ敗退に終わってしまいましたが、部員の急成長した姿が見られたことと、二名が個人賞を受賞したことは大収穫でした。これらは、部員の努力もさることながら、コーチの指導・OBの助言・保護者の応援があったからこそだと感じています。サポートしてくださった方々に心より感謝申し上げます。

以下は、俳句甲子園全国大会入選受賞者の文章です。

（顧問　永田真一）

僕たち文芸部は八月十九日から二十一日に行われた俳句甲子園全国大会に出場しました。俳句甲子園は俳都松山で全国の高校生が俳句の良さを語り合い、競い合う大会です。最近、俳句はテレビ番組でも取り上げられていて、皆さんにも少し身近なものになってきているのかなと思います。俳句甲子園は、テレビに出演されている夏井いつき先生が審査員長の一人になっており、二十五回も開催されています。

今回、僕はこの大会で個人賞の入選を頂きました。実は僕は中学生の時に吹奏楽部に所属していて、高校の時に友達に誘われ文芸部に入部したのですが、最初のころは俳句について何も知らない初心者でした。今は高校二年生で約一年間俳句を勉強しましたが、いまだに疑問に思っていることがあります。それは俳句の「優劣」です。俳句は鑑賞する人によってすごく評価が分かれるのです。俳句甲子園は十点満点で句に点数をつけるのですが、ある句に九点を付ける審査員の先生がいれば、七点を付ける先生もいるのです。審査委員の先生によって勝敗が変わるという場合があるのです。何も知らなくても見ているだけで楽しいと思える競技が多い中、俳句は何も知らないと鑑賞を聞いてもあまり良さがわからないと思います。

しかし、事前に知識を積めば積むほど面白いなと一年俳句をやって気が付くことができました。疑問は疑問のままですが、今回の大会の他校のディベートを見ていても面白さをひしひしと感じました。

僕はまだ二年生で、もう一年俳句甲子園に挑むことができるので、チームとしては決勝戦に出ることと、個人では入選以上の句を提出できることを目標に頑張りたいと思います。今回は入選を取りましたが、コーチからいただいた助言にもあったように、チームメンバーや自分の句の中でも入選や最優秀賞をとれそうな句は他にたくさんあったし、鑑賞する先生方によって評価は変わるので、この結果で一喜一憂せずに通過点だと思うようにし、次の

機会に生かしたいと思います。

（高二　望月陸玖）

鉄道研究部
二〇二二年夏の活動

我々鉄道研究部は、今年も例年通り鉄道模型コンテストのモジュール部門に作品を出展した。作品の要となるモデル地を決めたのは今年の五月。今まで制作したことのない海をテーマに、部員たちがそれぞれモデル地になりうる駅を紹介した。愛媛県随一の観光名所である下灘駅や、埋め立て地に建設された浜松市の弁天島駅など、様々なアイデアを部員が出してくれた。最終的にモデル地となったのが、私が提案した山口県柳井市にある大畠駅。ホームの目と鼻の先に瀬戸内海と周防大島が広がる大変フォトジェニックな駅だ。

＊

校外学習を挟み、六月に作業開始。去年までの活動は先輩からの指示を仰ぐだけで良かったものの、今年は先輩方が軒並み引退、卒業してしまったので、慣れない環境の中での作業となった。初めて模型班長となって、スケジュールの管理や後輩の育成など、上に立つことの大変さを知った。一個の細長いボードに大畠駅の様々な特色を加えるのは意外と難しく、作業は難航した。今回は海を重視するあまり海を作る箇所を広くとったため、全体的なレイアウトを考慮するのにとても苦労した。基本的にモデル地となった場所は地図のストリートビューを確認して制作するのだが、ネット上の情報だけではディテールを突き詰めるのには限界があった。

＊

中々作業が進まないまま学校も夏休みに突入し、部員たちも浮足立って模型への士気が下がりつつあった。作業の限界を感じた私は、観光もかねて単身で大畠駅まで赴くことに決めた。東京からフェリーで丸一日かけて徳島まで行き、四国を半周した後松山からフェリーで柳井まで辿り着いた。大畠駅は想像以上に瀬戸内海が綺麗に見える場所だった。眼前に広がるエメラルドグリーンに光る海。潮風によって年季の入った駅舎。海が見える駅としては最高のロケーションであった。部員たちに駅の写真を送り、作業再開。年季の入った駅舎は手先の器用な部員の手によって完璧に再現された。瀬戸内海はレジンを流し込んで一日乾燥させた後、さざ波というかなりストレートな名の液体を塗布することで、穏やかな波を表現した。中一から高二まで、十人の部員の手によって締め切り直前ではあったが無事に作品を完成させることができた。

＊

鉄道模型コンテストは、八月十九日から二十一日の三日間にわたって新宿で開催された。我々立教池袋は初日にプレゼンテーションを行い、瀬戸内海の表現や駅舎のリアリティを積極的にアピールした。今年は昨年にも増してクオリティの高い作品が多く、位の高い賞を手にしている常連校は３Ｄプリンタを駆使して街並みを作っていた。私たちはベストクリエイティブ賞をいただいた。初めての作業が多くかなり苦戦した作品ではあったが、我々なりに藻掻き、健闘した結果だと思う。

＊

来年、私は長かった立教池袋中高での活動の総決算を迎える。まだまだ模型に携わりたいが、その機会も徐々に失っていくだろう。ただ幸いなことに、鉄道研究部は優秀な先輩部員との入れ替わりで優秀な後輩部員たちがかなりいる。来年以降の鉄道研究部の実績をよりよいものにしてくれることを期待したい。

（高二　川澄優太）

今月の聖句

Never pay back evil for evil to anyone.

Romans 12:17

The previous message was about war, as seen in the Old Testament. I would like to continue with the same theme as found in the New Testament. Of course, we know that war is considered as an evil thing. We also know that Jesus continually emphasized peace. He advised us to avoid retaliation and revenge and to extend our love–even to our enemies. He says: But I tell you: Love your enemies and pray for those who persecute you, that you may be sons of your Father in heaven. (Matthew 5:45) The apostle Paul and other New Testament writers echoed Jesus' sentiment and expanded on it. Here is what Paul says: Never pay back evil for evil to anyone. Respect what is right in the sight of all men. If possible, so far as it depends on you, be at peace with everyone. Never take your own revenge, but leave room for the wrath of God, for it is written, "Vengeance is Mine, I will repay," says the Lord. "But if your enemy is hungry, feed him, and if he is thirsty, give him a drink; for in so doing you will heap burning coals upon his head." Do not be overcome by evil, but overcome evil with good. (Romans 12:17-21) If you carefully read these passages, you can find a couple of important ideas. First is that peace does not mean being passive or only being thoughtful. Peace must be actively pursued. Love your enemy, pray for them, overcome evil with good–these all tell us that there is an active process that must be done, must be followed. Second, there is an implied reward for your peaceful process; for Jesus, it means that your closeness to God is guaranteed. For Paul, helping your enemies will bring them pain. Although it seems like he is suggesting a revengeful pain, he speaks in metaphor. Heaping burning coals upon an enemy's head really means that their evil ways will be brought to a sudden end, allowing the peace of the Lord to enter the scene, and giving the healing process a chance to begin. The third idea is that if we actively work for peace, our inner soul will be changed. When God said Vengeance is Mine, I will repay, it means that if we leave those things--vengeance, revenge, envy-- to God's hands, we are freed from any of those deeply hurtful feelings. God's wrath is always just, and so if we leave it to Him, our freedom is assured.

— Chaplain Mark Stahl